

## はじめに観察があった ～伝書鳩を飼う～ 放した鳩が帰ってきた！

私達は生きた時代の刻印から逃れることはできない。昭和 30 年代の子供たちの周囲には無数の小さな命があふれていた。東京・世田谷の父が勤めていたカメラメーカーの社宅住まいの周囲には、野原や雑木林があり、遊ぶのに欠かせない自然が満ちあふれていた。毎日のように接することができた生き物との交流は、私のところに多くの温かい思い出を残してくれた。中学 2 年生の時に飼育し始めた伝書鳩との交流は、現在の私にとって動物との関係を教えてくれた原点でもあった。

伝書鳩を飼育したのは、近所に住む 2 歳年下の K 君の友達を通して、灰ゴマ（注 1）の番（つがい）2 羽を譲り受けたことが始まりであった。当時、「鳩の飼い方」（本間正和、愛隆堂。現在は絶版）や「伝書鳩の飼い方」（東京農業大学伝書鳩研究会編、金園社。現在は絶版）を購入し、飼い方について勉強した。とくに後者の本との出会いは、中学生であった私に将来の進路を動機付けてくれた。このような本を執筆している大学に入学して伝書鳩のことを勉強できたらと考えたことは事実である。この本は、単なる飼い方だけではなく動物分類学上の位置と形態、伝書鳩の歴史、伝書鳩の帰巢性など、事細かく書かれており、中学生の私にとって大きなインパクトを与えてくれた。

伝書鳩を譲り受ける前に鳩小屋を作製することになった。電気製品の木枠を利用して作った覚えがある。縦長の細長い小屋であった。小屋内には D 字型の飲み水器を置き、2 羽が休める場所を板でこしらえた。トラップ（注 2）は上部の入り口付近に設置した。

譲り受けた 2 羽を小屋内に入れた時、怯えて落ち着かなかった様子をいまだに覚えている。2 羽は絶えず一緒におり、しかもトラップがある上部の板の上で休んでいた。2 羽が鳩舎とも馴染み、飼育者である私と慣れたと考えたところを見計らって放鳩訓練を行うことになった。鳩の飼い方の本には、訓練の要領として、鳩の空腹を利用する。つまり鳩を空腹にしておいて、鳩舎に戻ればご馳走が食べられること、その本来の帰巢性に拍車をかけるように仕向けるとあった。2 つめに鳩の愛情を利用する。これは 1 つがいのどちらかを離し、鳩舎に残っている相手を思う気持ちから、早く確実に帰巢させようとするものである。雄鳩から訓練することになった。前日から空腹にし、鳩舎内には雌鳩を残して・・・と、ここまではマニュアル通りでことが進んだが、その後は手さぐりであった。2 羽が休んでいる目の前にトラップがある。その外側の到着台上に餌が見えるようにしてから雄鳩を鳩舎から取り出した。片手で雄鳩を持ち、到着台上の餌と鳩舎内の雌鳩が見える位置から雄鳩をゆっくりと手放してみた。

雄鳩は到着台に降りた。到着台の餌を食べ始めたのを見てから、鳩舎内にも餌を播いてみた。するとどうだろう、到着台で餌を食べ終わった雄鳩がトラップに頭部を入れて鳩舎内をうかがっているのではないか。これは中に入ると思った瞬間、見事雄鳩は鳩舎内に入って雌鳩と仲良く餌をついばみ始めた。**やったあ！この時の喜びは大きかった。**何日か経過してから雌鳩についても空腹と雄を鳩舎内に残すことで放鳩訓練を行い成功した。今度は 2 羽

同時に放す訓練を行うことになった。前回と異なるのは、愛情を利用する、つまりどちらか片方を鳩舎内に残すということがない点であった。空腹を利用することで鳩舎内に戻れば餌がもらえるという方法だけである。前日から空腹にしておき、まず雄鳩を鳩舎から取り出して餌を雌鳩のいる場所に餌を播いておいた。雄鳩はこの様子を鳩舎外から見ていた。次に雌鳩を鳩舎から取り出して、到着台近くから離れた。しかし、空腹にもかかわらず、2羽は家の屋根に止まり、しばらく周囲をうかがってから一目散に飛び立ってしまい、再び戻ってくることはなかった。**この時の落胆した気持ちは忘れられない。**がっかりしているところへ、K君がやってきて、この2羽の鳩は譲り受けたK君の友達宅に戻っているかもしれないから連絡を取ってみるといってくれた。しかし2羽は戻っていなかった。聞くところによると、この2羽は、K君の友達が放鳩訓練中に迷い込んできたものだと後になって聞かされた。きっと元の飼い主のところに戻ったに違いない。

同級生で鳩の訓練にかけては上手なN君の鳩舎を訪ね、このことを話すと、成鳩をつがいで訓練する時は雛を育てているときに行わないと無理だということを教えてくれた。これも愛情を利用する方法の1つである。そのほかにも、鳩に給餌する時には口笛を吹いていたこと、餌の入った缶を上下に振っていたことをN君から学んだ（N君は還暦を過ぎてからも鳩を飼育していることが同窓会で顔を合わせた時にわかった）。N君の方法は条件付けを利用した飼い方および訓練の基礎である。中学生でも鳩の飼い方の本にも書かれていないことを知識としてではなく、経験を通して飼育管理やその応用についてまでも話せることに頭が下がった。**鳩を飼育していると鳩を通した会話が友達とできる。**この事実、高校教師となってから動物飼育を通した観察実験を行った際にも似たような経験をした。**動物を通した会話が生徒とできることを学んだ。**

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

2羽が失踪してから、新たに4羽の鳩を飼育することになった。今度は、繁殖することを飼育の中に取り入れ、雛を育てて放鳩訓練することを計画した。4羽は、別々の友人から譲り受けた雌雄2羽ずつであった。雌は2歳の雑斑（注3）と1歳の黒ゴマ（注4）、雄は3歳の栗ゴマ（注5）と2歳の二引き（注6）であった。鳩を飼育して1年も経つと、雌雄の違いは外観から見分けることができるようになっていた。雄の体型は雌に比べ大きく、しかも鼻こぶ（注7）が大きく盛り上がっていることから区別できた。譲りうけたのは春先であった。あらかじめ鳩小屋は以前よりも大きなものを製作し、小屋内には鳩が休める場所と営巣場所を数か所設け、しかも見晴らしがきくように金網部分を多く設けた。小屋を作る際には、どのようにしたら鳩にとって居心地の良い環境になるかを考えた。小屋の設計や作成過程は、わくわくしながら取り組んだことを思い出した。小屋の柱となる木材は家屋の廃材を利用して作ることができた。当時は近所に廃材がいくらでもあったからだ。金網とトタン屋

根は新規購入であったが、のこぎりと金槌、それに釘があれば当時の中学生は、各自が工夫して鳩小屋製作を行っていた。

鳩舎内には、黒ゴマ雌と雑斑雌の後に、少し時間をおいて栗ゴマ雄と二引き雄をそれぞれ入れた。雄を小屋内に入れた時の様子は、二引きの雄が黒ゴマ雌に鳴き声を発しながら首を上下に動かし尾羽根を床に下げる求愛行動を繰り返した。やがて黒ゴマ雌は二引きの雄を受け入れ交尾行動が観察され番（つがい）が形成された。この時に雄が雌に惹かれる要因は何だろうと中学生ながら素朴に考えた。**鳩にも相性があるのだろうか？**

栗ゴマの雄は雌に対してすぐには求愛行動を示さなかった。二引き雄と黒ゴマ雌に雛がかえってだいぶ経った後からであった。

黒ゴマと二引きの番（つがい）に初めて雛が孵化するのを目撃した感動の瞬間をいまだに忘れない。産卵後の18日目に孵化することが飼育書に書かれてあった。日曜日の朝だった。鳩小屋の金網越しに巣皿のあるリング箱の隙間から二引きの雄が卵の殻を嘴で運んでいる光景を目にした。眼を凝らして見ると巣皿の中に黒い異様な目玉と赤肌の雛の姿があった。良かった！**雛が孵ったのだ。生命の誕生と神秘さ。今この前で起きている事実。時間が一瞬止まった気がした。**

この時、成鳩をつがいで訓練するには雛を育てている時に行ったらよいというN君の言葉を思い出していた。雛が孵ってから成鳩を番で訓練することに頭が過った。4羽を飼い始めてから餌を与えるときには、必ず口笛を吹きながら餌の入った缶を鳴らし、また同じ服装で鳩と接するように心がけた。雛は孵化20日くらいになると、体毛に覆われて親鳩を追いかけ、餌の催促をするようになり、しかも親と同じ餌をついばむようになった。そのころを見計らって、二引き雄と黒ゴマ雌の番で訓練することを試みた。すでに二引き雄と黒ゴマ雌は番（つがい）形成後に放鳩訓練し小屋に戻る事には成功していた。今度は雛を鳩小屋に残して、空腹と愛情を利用した訓練である。訓練は、前日から空腹にしておき、いつも決まった時間帯に餌を与える夕方に行った。口笛を吹きながら餌の入った缶を鳴らし鳩小屋に近づくと、二引き雄と黒ゴマ雌および雛たち、栗ゴマと雑斑が巣箱や止まり木から降りてきた。床面に餌を少し播くと食べ始めた。二引き雄と黒ゴマ雌が餌を食べ始めたと同時に、捕獲し小屋の外へ出した。2羽はすぐに到着台に止まりトラップをくぐり抜けて小屋内に入った。**やったあ！**そこでいつもと同じように餌を与えた。早速雛が親に餌をねだっていた。空腹と愛情の利用。そして小屋に対する愛着。この試みは成功した。

自宅周辺の放鳩訓練を何度か繰り返したのちに、自宅から約2km離れた東京オリンピック会場であった駒沢公園から放鳩することになった。二引き雄を放鳩籠（注8）に入れ、駒沢公園まで自転車で運んだ。公園広場で二引きを放ち、自宅まで急いで自転車をこぎ二引きが戻るのを待った。自宅について間もなく青空に鳩が1羽旋回して飛んでいる姿を目撃した。間違いのない二引きだ。やがて屋根に降り鳩小屋に入った。この時、雛が孵った時の感動に続いて鳩の帰巢性の不思議さについて考えた。

その後、空腹を利用し親子で放鳩訓練することにも慣れたころ、父の会社の社宅が取り壊されることになり、3km離れた川崎市溝口の社宅に引っ越すことになった。生まれてから15年間育った土地を離れる寂しさと愛着ある鳩小屋も取り壊さなければならなかった悲しさを感じた(写真1)。高校1年生になる春だった。8羽の鳩たちだけは引っ越し先の社宅につれていき飼育することになった。.....



1. 中学3年生の春. 引っ越しのため鳩小屋を取り壊す。  
左:筆者 傍にしているのがK君

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

引っ越し先では新たに鳩小屋を作製した(写真2)。自宅周辺の地理的環境と鳩小屋が新しくなったものの、小屋内の鳩の構成員と飼い主は変わっていない(写真3~4)。しばらくしてから8羽で放鳩訓練を繰り返していった。放鳩訓練の様子をカメラに収め、大学ノートに鳩小屋周辺の飛翔状況や小屋に戻るまでの順番や時間などを記録していった(写真5~8)。



2. 新たに作った鳩小屋



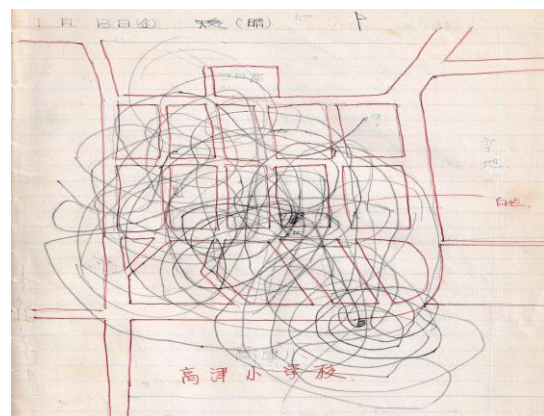
3. 小屋内では約30羽が生まれ育った



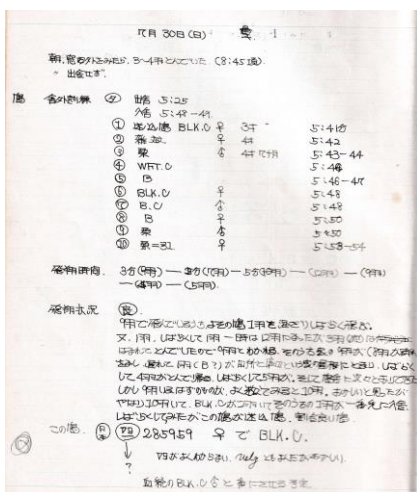
4. 飼育していた鳩たち。奥は巣箱。巣箱上から放鳩する際の窓がある  
止まり木を数か所配置。正面上部にトラップのある入り口がある



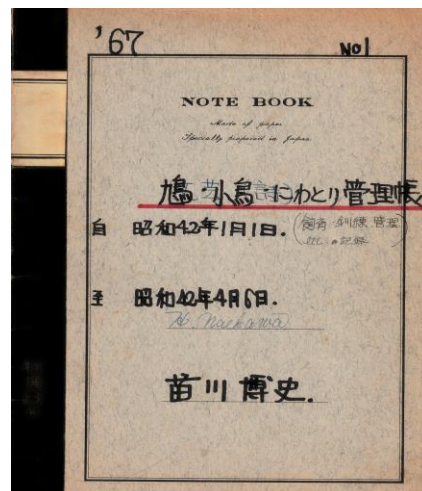
5. 放鳩訓練中



6. ある日の飛翔状況記録



7. ある日の放鳩記録



8. ハト・ニワトリ・十姉妹の飼育管理日誌



自宅周辺の放鳩訓練に慣れたところを見計らって、西に約 15 k m離れた横浜市長津田から放つことになった。番（つがい）の片方を鳩小屋に残し愛情を利用した方法である。今回は二引き雄と雑斑雌の 2 羽（番は別々）を放鳩籠に入れて自転車で運び放鳩した。2 羽は間違いなく一緒に帰ってくるものと期待していたにも関わらず、自宅に戻ってきたのは二引きの雄のみであった。翌日も翌々日も雑斑雌は戻ってこなかった。2 羽はどのようにして途中で離れてしまったのだろうか。思い当たるのは、自宅周辺を飛んでいるときに雑斑は二引きよりも早く骨を休めることが多く体力がやや劣るとみてはいた。帰ってこなかったことに対して**栗ゴマ雄に申し訳ない気持ちになった**（写真 9）。栗ゴマ雄は雑斑雌が戻ってこない日からウーウーウーと悲しげに鳴いていた。羽をつぼめてうずくまっている姿を何度も目撃した。金網越しに外を見上げていることが多かった（写真 10）。やはり鳩にも愛情があり、配偶鳩を失った時の悲しみが伝わってきた。



9. ある日の栗ゴマ(左)と雑斑(右)



10. 外を見あげていた栗ゴマ

鳩の数も増えてから自宅から北に 4.5 k m離れた川崎市登戸から 12 羽、別の機会に西に 14 k m離れた横浜市つくし野から 13 羽を放鳩した。登戸からの 12 羽は当日全鳩が小屋に戻ったが、つくし野からの 13 羽は当日 4 羽、2 日目 3 羽、3 日目 1 羽であり 5 羽が戻らなかった。

こんなこともあった。2 羽の雌が 1 羽の雄をめぐり巣箱内で争っていた。雄は生後 5 か月の若い鳩であった。巣皿には卵が 1 つ産み落とされており、1 つは巣皿外に産み落とされていたのである。雌にも雄を選択する際、激しい争いがあることを初めて知った瞬間でもあった。

よその鳩が迷い込んだこともあった。右脚には 1966 年生の JAPAN-VP7777 の足環（注 9）があり見かけ上では生後 1~2 か月と思われる幼鳩の灰ゴマであった。足環があるということはヒトによって飼われていることを示している。埼玉県羽生市の住所が刻み込まれた足環をつけた鳩が番で迷い込んだとこともあった。大田区仲六郷や練馬区関町の住所が刻み込まれた脚環を付けた 1 歳の灰ゴマと 1 歳未満の黒ゴマが迷い込んだこともあった。おそらく鳩レース中（注 10）に迷い込んだ鳩は 16 日目に放鳩したが、高く舞い上がって家の鳩

とは混ざらないでどこかへ飛んで行ってしまった。2日後に放鳩した鳩が何と鳩小屋の到着台に寒そうにしてじっとうずくまっているのではないか。**戻ってきたのだ**。喜びと驚きの感情が入り交り複雑な心境であった。しかし翌日に他の鳩と一緒に放鳩したところ、家の鳩と別れて飛んでしまいその日に戻ることはなかった。ところがである。**失踪したと思われた次の朝、鳩小屋内を見るとあの鳩が羽を休めているではないか**。鳩はこの鳩舎や他の仲間たち、あるいは飼い主の私に対する何らかの愛着をもって戻ってきたのだろうか。似た経験は他の迷い込み鳩でも見られた。放鳩した日は戻らず、翌日に戻ったことを。盗まれた鳩が翌日になって戻ってきたこともあった。鳩が戻るのにはいったい何の関係しているのだろうか。

帰巢性にはいくつかの説がある。当時の飼育書には次のことが書かれてあった。帰巢するための条件として単に帰ろうとする意志、方向を判定する能力、飛翔力を挙げている。

なぜ帰巢しようとするのか。それは鳩が自分の巣に対してもっている愛着心であると。この愛着心は個体維持、種族維持、社会保持行動によるという。帰巢性に関して諸説あるが、(1)視力説—鳩の優れた眼を活用して遠方から自分の鳩舎を見出すという説。(2)逆行説—鳩が放鳩地に運ばれるとき、途中の風景を連続的に脳裏に納め、連続的な記録を逆行することで鳩舎に戻るという説。(3)電磁説—放鳩された地点の地磁気の方角と傾度差を測りながら戻るという説。現在ではどのような説が有力なのだろうか。ビルチュコ博士は、ハトの幼鳥は地磁気に頼って帰巢し、成長するに従って太陽コンパスの利用を確立していくと述べている。1971年にコーネル大学のウィリアム・キートン博士が行った伝書鳩による「鳩の方向感覚」の研究では、太陽光、視覚記憶そして磁気的な方向感覚という仮説をもとに長期にわたり実験を行った。そして1979年にはこのバクテリア（走磁性細菌）から「生体磁石」が見つかる。この生体磁石は磁鉄鉱を脂肪酸が覆う構造をもち、マグネトソームと呼ばれた。最近の研究では頭部から磁気を感じる物質（マグネタイト：磁鉄鉱）が発見されており太陽が見えていても帰る方向を完全に見失うことがわかり、ハトの帰巢性には太陽・視覚よりも地磁気の方がより大切であることが判明している。

広島大学の原田博士が証明したものでは鳥には磁性を持つ耳石が耳石器内にあり、これが地磁気を感知してナビゲーターの役割を果たすというもの。この説は鳥の耳石器にはほ乳類にはない第三の耳石器「壺囊」があり、中の耳石にある磁性物質が地磁気の変化に応じて、感覚毛を刺激し、感覚細胞を興奮させ、これが脳に伝わることによって、飛ぶ方向を判断するというもの。原田康夫博士は、ハトの内耳にある感覚器官の壺囊（このう）が磁気センサーの役目をすると主張し、実際にハトでの実験が行われ壺囊が地磁気を感じるセンサーだということを立証した。

帰巢性についてはまだわからないことが多い。科学は仮説を検証し、繰り返して得られる事実を通して真実に近づくことができる。

鳩の飼育経験からわかったことがある。鳩が自分の小屋に戻るのには、雌雄と親子間の愛情、鳩同士の仲間関係、そして飼い主を含めた鳩小屋への愛着によるものだという科学するところを学んだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

今でも鳩の夢を見ることがある。夢の中に現れてくるのはきまって中学時代の鳩小屋と鳩たちである。それも餌を与えられないで小屋の中で生き続けている鳩たちである。孵化したばかりの鳩がいる。親バトが巢内や止まり木に何羽か休んでいる。その時にはっとして目が覚める。あのときの鳩たちは今どうなっているのだろう。

駅構内や神社、公園・広場で餌をついばんでいるドバトたちを見ると、この中にかつて飼育していた鳩たちの子孫がいないかと探している自分に気づくのである。

注 1：羽色全体が灰色で、翼には黒色の斑点が一面に出ており、尾羽の末端が黒色になっているのが特徴

注 2：鳩舎内に入ったら再び外へは出られないという特別な入り口。アルミニウム製でU字型をしている

注 3：羽色が3色以上、翼全体に混じっているのが特徴

注 4：翼全体の黒色の中に灰色の斑点が混じっているのが特徴

注 5：体全体が灰色がかった栗色をしており、翼に栗色の斑点を持っている

注 6：羽色全体は灰色、頭と胸は金紫の光沢を帯び、雨覆羽に2本の黒色の横線が入っている

注 7：前額と嘴の接したところにあるやわらかい白色角質のもの

注 8：訓練に必要な鳩を入れて運搬するための郵送籠。当時4羽入りの柳製を用いた

注 9：鳩の戸籍でもあり、全国的に統一された日本鳩レース協会の脚環をつけることで所有者の所在がわかる。脚環のない鳩は価値のないものだという認識があった

注 10：自宅鳩舎から遠隔地へ鳩を輸送し、距離と帰巢時間を競うもの。当時日本鳩レース協会のものが一般的であり、鳩は脚環をはめていた。私は鳩レースには全く関心はなく、鳩の帰巢性にとりつかれていた